

2025 年 4 月 3 日放送

漢方経方医学シリーズ③
胸･膈･心下と五臓六腑について

広島大学病院　漢方医学センター　教授　　**小川　恵子**

前回までで、「胸」「心下」と「膈」は、気の昇降出入というきわめて重要な機能を担う、経方理論で特徴的な部位の概念であるとお話ししました。今回は、この構造について詳しく説明します。

この時、特に注意したいのは、胸と肺は異なる概念であるということです。『傷寒論』において結胸証・胸痞・胸満など，胸という字を使う場合は、肺ではなくて胸です。また、『傷寒論』では特に膈を重視しています。 膈は，肺・心とそれより下にある臓を隔てる膜で、西洋医学の横隔膜（diaphragma）に相当します。『傷寒論』における膈は、もちろんそれよりはもっと広い機能をもっていると定義されますが、解剖学的には、膈とは横隔膜を含んだ機能的な構造物であると考えてください。脈がミクロの身体を表しているように、膈が外殻における腠理と構造のうえでも機能のうえでも相似していると考えます。

また、前回三焦の話が出てきましたが、膈によって上焦と中焦が隔てられます。

胸・膈・心下は気の昇降出入というきわめて重要な機能を主っています。直接的には膈が出入、胸と心下が昇降を担っています。衛気の外殻への供給は、**胸→膈→皮、心下→膈→肌**というルートをとり、衛気の還流においては胸と心下の昇降機能が膈の出入機能を補完しています。

前回お話したように、『傷寒論』では外殻の構造(皮・肌・腠理)と外殻より内部にある五臓六腑の配置、そして今回話題にしている胸・膈・心下の働きがわかれば、その処方が理解できるようになると申し上げました。この、臓腑についてもその他の概念とのかかわりを中心にお話していきたいと思います。

臓腑については、中医学理論とほとんど同じなのですが、その異なる点を中心にお話しします。

[胃と脾]

『内経』においては胃の重要性が強調され、実際の臨床でも脈診で胃気を診るとされていますが、一般的な中医学理論では胃よりも脾に重点が置かれています。

一方、経方理論では前回でもお話したように『内経』に沿って、胃が気の最大の産生場所であり、重要と考えています。胃気が産生され，全身に充分に供給され、ほかの臓器や器官が働き，身体が生体として機能する、そして、脾・肌は胃気を蓄える場と考えます。胃気は全身に供給され、その供給量は状況に応じて変化します。例えば安静時には胃気の供給量は少なく運動時には多いのです。胃には、守胃機能、つまり胃気が過剰に出すぎないように抑制する機能があります。守胃機能が失調すると胃気が正常に使われずに失われたり、特定の方向に過剰に出たりします。

『傷寒論』の処方から考えてみましょう。例えば『傷寒論』の第 315 条には、白通加猪胆汁湯という処方があります。これを投与した場合に「脈暴出者死」とあります。胃気が異常に鼓舞されて胃気が出る方向にのみ向けられ守胃されなくなり胃気が失われて死に至るのです。このように、傷寒論に記載されている処方を理解するためには「胃気」という概念を想定したほうがわかりやすいのです。

［肝と胆］

中医学では肝が気血の疏泄を行っているとされています。しかし経方理論では胆が気の疏泄を行いそれに伴って肝も疏泄を行うと考えています。つまり、胆は気の疏泄と収斂機能を担い、全身に作用しています。肝も胆の疏泄の影響を受けて疏泄を補助するとともに蔵血機能を担います。

肝の蔵血という機能には血の統摂機能も含まれています。また蔵血の働きを主に担う場を血室と呼び、特に解剖学的には肝臓、脾臓、骨髄そして骨盤静脈叢を代表とする下腹部の血流も含んでいます。

胆は単独ではパワーが足りないので、気の出入においては、胆気の疏泄・収斂を膈が増幅して調節していると考えます。さらにこの調節機能である膈の開閉は膜を介して腠理の開閉と相互に影響しあっています。また胆の疏泄・収斂は血管の拡張・収縮をコントロールしています。さらに、胆の疏泄・収斂は、各臓腑の調節機能、例えば心の収縮・拡張、肺の宣散・粛降、腎の開閉などにも関与しています。

［肺と心］

肺は宣散と粛降という機能をもっています。これは中医学における定義と同じです。経方理論では宣散には皮における衛気の推進のみならず、肺から心・心包への宣散も含まれています。

粛降は 2 段階の粛降からなっています。経方理論では、粛降を**肺→胸→膈→心下**という第 1 粛降と、**心下→小腸→膀胱**と大腸という第 2 粛降を想定していますが、肺はこの第 1 粛降を担っています。肺はこの宣散と粛降を通じて，心と津液を交換し、血中の津液の増減をコントロールしています。

肺の宣散と粛降という過程は呼吸と同期し、吸気は粛降と同期して行われ、肺で胃気と混合され、そして、呼気では肺の宣散と同期して心包・心へと行き、脈外の気・脈中の血として全身に供給してきます。また、呼気と吸気の間に呼気でも吸気でもない時間、停止層というようなものがあるのに気づいたことはありますか。これは、この部分で腎の固摂作用が関与し、これがいわゆる腎の納気と呼ばれる働きになります。また、経方医学では腎に対しては、胃気から腎に気が供給され蓄えられると考えられています。

今回は、①経方理論では「胸」「心下」と「膈」が気の昇降出入というきわめて重要な機能を担っている ②胃が気の最大の産生場所である ③胆気の疏泄・収斂を膈が増幅して調節している ④胆の疏泄・収斂は、各臓腑の調節機能に関与している ⑤肺は呼吸と同期した宣散と粛降を通じて血中の津液の増減をコントロールしている、ということを説明しました。

次回は、気の流れを部位別に詳しく考えます。